

越後の国、松之山郷に伝わるロマン伝説

ほくほく線沿線の真ん中に位置する松代駅、かつては松之山郷と呼ばれ、江戸時代を通じて六十六ヶ村で成るといわれていました。その後、ほぼ半数に近い村々で南組と北組に分けられ、松之山を南組、松代を北組としました。この一帯は豊富な民話や伝説が伝承されており、口承文芸の発達していた地域であろうと判断される、と紹介されています。

また、昔話の内容を信じる者はいませんが、伝説の内容はある程度まで人がこれを信じ、どこかにその根拠があり、伝説は必ず一つの村里に定着しています。けれども、昔話は「昔むかし、あるところ・・・」から始まります。

難しい解釈は判りませんが、当地方に伝わる代表的な伝説、松茸神社にまつわる伝説は、松代では『松茸大権現』、松之山では『奴奈川姫』として語り継がれています。また、信越国境の山頂にある野々海池を舞台とした伝説は、松代では『蛇切り丸物語』、松之山では『名刀蛇切り丸』、隣村の大島村（現上越市大島区）では『血染めの竹』、中里村では『七ツ釜』伝説として伝えられています。真実はともかく、こうして古代街道を通じて人々の交流が育まれた時代のロマンを物語っているのではないかと想像します。

ここでは、こうした酷似している伝説を町史を参考に紹介しています。

新潟県最古の建造物

松茸神社にまつわる伝説

松代では・・・『松茸大権現』として伝説

本尊は、中天笠摩伽陀国から五葉松と青芋を備え、長さ四間・横五尺余りの舟に乗り天降らせ拾い、魚沼郡外丸郷辰ノ口にお着きになった「今でも舟繁という旧跡があるという」。ところがこのとき、白石大明神（一説には「白鬚大明神」）が後を追って来られたので、ここから獅子に乗り、陸地を走り抜けられた、ここを『獅子渡し』という。それから松之山を越え、山の頂上で藁を解き、お休みになった所を『解藁峠』という。東川に達せられたとき、一人の洗濯女に「後から渡しを追ってくる者があるが、私がここを通ったということはいわないように」と頼んだ。女は快く承知したのだが、念のため、一人の供を残して見張りさせることにした、これを『後見の権現』という。猪之名村にしばらく入ってお休みになった所を西所の鎮守として崇め奉っている。それから山路を越え松代の千年山の辺にお休みになっていると、神狗（犬）二匹が現れて左右をお護りし、お供することになった、ここを飛岡の松という。やがて御山（松尾山）に踏み入ることになったのだが、麓の村にしばらくお留まりになり、神狗をここに止めておかれたので『犬伏』という。菟川を越え、嶮辞を開いてお進みになり、丑寅高松に社『松茸大権現』を建て鎮座ましましてから、今日まで国土を鎮護していられるのである。権現が賊に追われて逃れ給うとき、麻で目をつかれたので、松之山郷では今も麻をつくる者がいないと言われている。

山に明神舟道という黒岩や不行滝という滝がある。奥の院は女人結戒の浄地で、そのため中院があり白馬観音脇立三十二応神を祀る。中奥開山は弘法大師で、直筆の大般若経六百巻は宝物として伝えられている。

当山最初の社殿は北東の頂上高松にあったが、大同二丁亥年、坂上田村麻呂將軍の祈願所として西南の頂に移築した。この社殿（間口三間、奥行き三間）は、飛驒の工匠の造営するところをと伝えられている。

中古、鎮守府將軍源義家公の祈願所となり、延徳年間には足利將軍義尚公の祈願所となる。天文年間には上杉幕下大熊備前守朝秀、針生藤兵衛久吉公の祈願所となり、長尾為影、影虎からは関東出陣の際所持した軍配並びに波平の太刀一振りが奉納された。特に謙信、景勝の両代にはき願書として尊崇された。その後、福島城主堀秀治、高田城主松平忠輝、酒井家次、松平忠昌、光長らに、いずれも祈願所として重んぜられ、社殿修復等しばしば行われた。

例年四月八日（現 五月八日）の祭礼は、七つ詣りとし称して松之山郷各村落から参拝者が群集し賑わいを続けている。

松之山では・・・『奴奈川姫』として伝説

大昔、西頸城の「うど」の里に住んでいた奴奈川姫は、いやな求婚相手から逃れる為に「うど」の里を後にして妻有(魚沼)の里まで来たが、追手の為に信濃川は舟止めになっていた。困っているところへ一匹の鹿が来て川を渡っていった。これを見て姫の一行は鹿の渡った跡を頼りに川を渡った。後の人々はこの伝説によってこの地を『鹿渡』といい、今も呼称されている。

山頂に逃れて濡れた衣服をといて乾かし、しばらく休まれた(この地を「解き藁峠」、今の豊原峠)。これより峠を下り、途中「おとみ坂」を下り、東川村に着いた。姫はここに供の者を一人残し追手を見張らせた。後にここに宮を建て『後見権現』と呼んだ。さらに高館を越え三桶村から松口村に逃れて来た。庭先で洗濯をしている老婆がいたので「追われているので、助けてほしい」と頼んだ。老婆は、「隠してほしいならこの洗濯水を飲め」と言った。姫はしかたなくその水を飲んで隠してもらった。その後へ追っ手が来た。老婆は「おら家に隠れる所があったらどこでも探せ」と言って追手めがけて洗濯水をばらまいた。後にここに「足洗権現」(葦原権現)として祀ったという。

奴奈川姫は難を逃れて浦田村に走った。追手の目を逃れる為、農家の女になりすまして芋を紡いでいた。追手は来たがうまく逃れることが出来た。ここに大宮を建てて「松芋神社」と称した。犬伏村に来てようやくここを住家とした。「松芋大権現」として今も五葉の松の緑と共に昔を物語っている。

毎年五月八日の大祭には、男子七歳の成長を祝い、強くなることを願う「七つ参り」の風習が盛んに行われている。

著者、関谷哲郎氏の松之山郷の歴史散歩の本によると、「津南町史」下巻に奴奈川姫が男神に追われて松之山へ逃げ込んだ話を次のように紹介しています。

鹿渡り(津南町)の松尾大権現の女神は、横恋慕された神から逃れて、下船渡から舟に乗り、舟つなぎ沢に舟を止めて、鹿にまたがって川を渡り、休んだ所が権現社で、さらに松之山へ向かい解藁峠を越えて東川村へ逃げた。土地の神が犬伏山へ逃げるように手配して自らは、村を背にして峠に立ちつくして守ってくれた場所に、アトミゴングサマがある(以下省略)。

「そもそも、大権現は本地馬頭観世音菩薩様である。この地へ神(奴奈川姫命)の姿に替わって現われた由来は、中天竺(インド)摩訶陀国(仏教発生の国)より五葉の松と、数本の青芋をたずさえて土民に伝えるためであった」としています。

また、この女神は、「東川、猪之名を経て千年の山に休む時に、神狗(犬)二匹が飛来して従ったので、さらに松平(松代)を経てお山のふもとに休まれた。この地に神狗を止め置かれたので犬伏村と名付けられ、お山の表口とされた。それより菟川を渡りお山に踏み分け入られて、お山の高松の地に鎮座なされた。」とあります。

昭和34年、松代町と町村合併した奴奈川村は奴奈川の名が示すとおり、奴奈川姫の伝説を残す歴史の古い地区として紹介されています。

伝説では、奴奈川姫は大国主命との間に生まれた御子(長野県諏訪大社の祭神、建御名方命)とつながりを持つと、この地で休まれて機会を伺い、渋海川をさかのぼって浦田村に入りましたが、目的かなわず引き返した土地で、姫は松代町大字犬伏に帰りました。土地の人々は姫の徳を慕って姫の宿だったゆかりのある地として奴奈川の名を冠してきたとあります。

国重要文化財指定『松芋神社』

古来より、松之山郷六十六ヶ村の総鎮守としてだけでなく、刈羽や魚沼や近隣の人々から青芋、機織りの神として尊崇された織物の神、時に武運長久、男児の守り神として広く信仰されてきた松芋神社は、十日町市犬伏の松芋山頂(360㍎)に鎮座し、人々から崇められ慕われてきました。

松芋神社(大権現)は文化庁、県外専門技官の調査の末、昭和53年5月31日文部省告示一二二号で国の重要文化財に指定されました。新潟県最古の建造物として、今でも大切に保護されています。

信越国境山頂、野々海池まつわる大蛇口マン伝説

松代では…『蛇切丸物語』として伝説

松代の蒲生ヶ池の主は竜神であるが子供は姫ばかりで男の子はなかった。そこで姫によい婿をと思い、浦田の鼻ヶの池の主に相談した。鼻ヶの主は、御坂峠を越えた野々海の池に頃合の男の子があることを知っていたので、喜んで媒酌を引き受けた。ところが、話を聞いた野々海の主は「あんな村下の汚水の流れ込む池へは息子はやれない」とにべもない返事であった。

鼻ヶの主は面目をつぶされて怒ったが、それにもまして怒ったのは蒲生の主である。何しろ蒲生の主には郡内随一の大池に住みついているという誇りがある。鼻ヶの主と相談の結果、蒲生の主は水梨の中屋から、鼻ヶの主は浦田の小坂から、それぞれ宝剣を借りて野々海の主を退治することになった。こうして野々海について蒲生の主は「私は必ず相手を討ち果たす。赤い波が出たらこれを切り、白い波が現われたらこれを精一杯声援してほしい」と鼻ヶの主に言い置くとザブンとばかりに池に飛び込んだ。戦うこと十数刻、紅波、白波荒れ狂った池の面はやがて静まり、身に十数か所の刀傷を負いながらも蒲生の主は静かに浮上した。ついに野々海の主を倒したのである。

この戦いで蒲生の主は片目を失ったので、蒲生神社拜殿の竜神彫刻が片目なのはこれに由来するという。切り伏せられた野々海の主の胴体は臼ほどの大きさと、七日七晩、渋海川を流れ下ったという。また、大島村の菖蒲側にも流れ落ちた血潮に染まった竹が今も「血染めの竹」として繁茂しているという。

水梨の中屋には、この戦いの後、屋根のぐし(棟)に菖蒲の主に貸した宝剣がささっており、それに竜の牙まで添えてあったので、以後、この宝剣を「蛇切丸」と称して家宝として大切に保存していた、とあります。

続く伝説、七ツ釜物語

野々海の主には三人の男の子があった。折りよくこのときには厄をまぬがれたが、いつの機にか親の仇討ちをと念じ、日夜武芸に励んだ。蒲生の主はこの動きを知り、その来週にそなえる為、大戸講の人々(庚申仲間)に頼んで池の周囲に七五三縄を張り巡らし、その上大蛇の嫌う金物を下げてもらった。しかし、年も老い傷痕も深いので後難を恐れ、姫を連れて中魚沼郡の七ツ釜の滝に逃れることにした。祖先以来、永年住み慣れた池を離れ、村人とも別れを告げることとなったが、なお去りがたき想いをこめて、「十七歳の妊婦が真の闇夜の真夜中に黄金の鍬で三鍬うなえば、必ず元通りの池となり、私も再び帰ってくる」といい、なおまた、「日照りが続いて困った時は、雨乞いの水を貰いに来るように、お血脈をふちに投げ込んで、その沈んだ所に私は居る」ともいい置いて尽きせぬ別れを惜しんだ、とある。

蒲生集落から七ツ釜への雨乞いの水貰いは最近まで続いたとある。
また、七ツ釜には「蒲生がふち」というところがあったという。

松之山では…『名刀蛇切丸』として伝説

大島村と境する鼻毛峠の山頂に160平方メートルくらいの浮島を浮かべた大池がある。この地を“鼻毛の池”といい、この池に伝わる伝説がある。

ある日のこと、北浦田村高沢家(屋号:小坂)に二十四・五歳の若者がみすばらしい姿で訪れ、「行き暮れて難渋しておりますが、しばらくの間憩わして頂きたい」と言う願に主人が応諾、しばらくここにいることとなったが、すこぶる機敏さと軽妙な身のこなしにより、たちまち一家になくってはならない重宝な人となりいつしか三年の歳月が流れた。

ある日のこと、改まって主人の前に出たこの若者は、今までいくら問われても語らなかつた身の上話を語って言うには、「実はこの上の鼻毛の池の主が私であります。今を去る三年間、蒲生の池の主に頼まれて仲人の役を引き受けましたが、信越国境の山頂野々海池に適当な婿があることを聞き、はるばるこの池の主を訪れ「蒲生の池はこの周辺随一の大池で、姫も十人並み以上の美人、もう年頃になったので適当な婿をと詮索の末、こちらによい若人のあること聞き及び、不肖私が仲人を受けて本日参池いたした次第」と頭をたれ辞を低うして懇望したところ、野々海池の主は『あんな田の水や汚水の流れ込む汚い蒲生の池なんか、大切な息子をあんなゴミ池の婿に…とんでもない、とっとと帰れ』と剣もほろろのご挨拶に、私はカァッとなって噛み殺そうかと思いましたが、牙先三寸で歯を噛締めて我慢し、その日はそのままに帰っ

て蒲生の池の主に委細話したところ、主人も逆鱗一方ならざるものがありました。まあまあとなだめ、機を見てこの恨みを晴らすべく約してお互いに一劔を磨くことにしました。そこで私はお宅に伝わる名刀をお借りしたい為、三年間お宅に仕えました次第、何卒私の心情を酌量して下さって」と懇願したところ、主人は同情して直ちに快諾、二尺有余の名刀を貸与した。

一方、蒲生の池の主も水梨の中屋（屋号）から同家の名刀を借り受けて、「もし私が勝てば一週間後に屋根の棟上にお返しする」という事を約した。鼻毛の池の主も同様、「私が勝った際は屋根の棟に野々海池の主の蛇骨の一片と共に名刀をお返しする」という事を誓った。高沢家の三人兄弟中、長男と二男の二人は深く同情し助太刀に行く事になったので、天気晴朗な吉日を選び、決死の覚悟の上、野々海池の主を討ち取らん一同打ち連れて出発した。

野々海池の主もかねてこのことを知り、信州森村の某家から伝家の名刀を借り受けて時やおそしと待ち構えており、「ここにいよいよ国境の山頂は時ならぬ乱闘の巷と化すことが必至となり、嵐の前の静けさ陰悪な重苦しい空気は山を圧した。かくして山頂についた一行は、殺気漂う湖畔に身支度万端怠りなく、さてこれからという時に助太刀の二人に「私ども赤の波（松代では白の波）となり、野々海池の主は黒い波（松代では赤い波）となって戦うが、黒い波が出たらこれを斬り、赤い波が出たら応援すること。また、野々海池の一族は動物に姿を変えて池から逃れようとするから、一匹残らず切り捨ててくれ」と約していで立った。名刀を口にくわえて湖面に寄ると見るや、一天にわかにかき曇り、風うなり、雨は地軸を流すが如く電光耿々と眼を射る中に二頭の巨竜湖面に躍るよと、見る間に池の中に姿を消したが、しばらくの後たちまち池は乱闘の巷と化した。ある時は赤が黒を制し、またある時は黒が赤を押し、実に一上一下の中に湖畔の若者も躍起となって黒を斬り赤を助け、池からはい上がる動物を一匹残らず斬って捨てること実に七日七晩に及び、池は真っ赤な血の池と化し、ついに積年の恨みをはらして鼻毛、蒲生の池の主は戦勝の喜びに天へも昇る思いでそれぞれの池に凱歌をあげたという。

この戦いに使用された名刀は、一週間後に直径六寸厚さ四寸ぐらゐの蛇骨と共に高沢家の棟上に返されたが、蛇骨を三等分して一片を信州に届け、一片は同家から分家した大荒戸村の高沢家へ届け、それぞれ家宝として保存されたという。その後、野々海池は主を討たれ、一族郎党皆屍を水にさらしたため、池は濁き池底は草木の生える状態となったが、絶滅したと思われた一族に三名の遺志が残存し、密かに蒲生、鼻毛の池の主を仇敵とねらって遺恨十年一劔を磨いているとの話が伝わった。これを聞いた両池の主は既に老齢であり、彼らの一劔に敵せずと、鼻毛の池の主は中頸城の某池へ、蒲生の池の主は中魚沼の七ツ釜にそれぞれ身を隠したといわれる。野々海池の遺子も討つべき相手を失ってその志を捨て、どこかへ去った後は荒れ果て、蒲生の池も田んぼとなり昔をしのぶ何物もなくなり、鼻毛の池のみ山頂に満々と水をたたえている。

中魚沼郡中里村よりの『七ツ釜物語』

昔、水沢村の馬場に太田新右衛門という豪胆な庄屋が住んでいた。十人力といわれ、鉄砲撃ちの名人だった。ある日太田新右衛門は網と鉄砲をかついで、釜川の上流にある田代の七ツ釜へ出かけて行った。そこは柱状の岩壁がそそり立ち大木がこんもりとかぶさって、昼でも夕方のように暗かった。そして青々と水をたたえた滝壺にはたくさんの魚が泳いでいた。

新右衛門は金色の鯉や銀色に輝く鮒をあきずに眺めていたが、その日はそのまま帰った。それから毎日、美しい魚族の住む七ツ釜を訪れ、じっと魚を見ていたが、ある夜、新右衛門の夢枕に白髪白衣の老人が立ち、「わしは七ツ釜の主であるが、日頃の勇氣に免じて一網だけ魚を取る事を許す。しかし二網引くと許さんぞ」といって消えた。

翌日はよい天気だった。新右衛門は急いで七ツ釜へ行き、滝壺に網を打った。すると網に入りきれないほどたくさんの魚が捕れた。喜んだ新右衛門は一網という約束を忘れて無断で網を投げ込み、そして網を引き上げようとしたところ、強い力におさえられてどうしても引き寄せることができなかつた。その時、滝壺の中からもらんと目を輝かせた大蛇が現われ、新右衛門に襲いかかった。新右衛門はそばの鉄砲を取るなり一発ぶっ放した。すると、今まで晴れていた空がにわかにかき曇り、雷をともなって豪雨が降り出した。さすがの新右衛門も恐ろしくなり逃げ出すと、滝壺の中から真っ赤な炎を吹き出しながら大蛇が追いかけてきた。新右衛門は死に物狂いで岩によじ登り、谷を渡って逃げ、弁天堂の中に隠れて戸を締め、念仏をととなえていた。すると大蛇はお堂を七重八重に巻き、口から炎を吹き出すので、お堂はその火で燃え出した。しかし大蛇も左目と脳天を鉄砲で撃たれているので、次第に力尽きてとうとう死んでしまった。新右衛門はようやく馬場の自宅にたどり着いたが、大蛇の毒気で高熱を出し、蛇のようになうちまわって死んでしまった。

それから七ツ釜の魚は全部片目になったといわれるが、村ではその後七ツ釜で魚をとることを禁じ、大蛇と新右衛門の命日には毎年法要を営みその霊を慰めている。今でも太田家の者が七ツ釜へ行くと、必ず大雨が降り、弁天堂の鈴の綱が大蛇に見えるという、とあります。

以上が、松之山郷に伝わる数多くある伝説の中から何の因果かわかりませんが、村々を渡りつなぎ、その内容は違いこそすれ題名に語り継がれる意味は酷似している二話を紹介しました。各々の村里に定着し酷似している伝説は、古代街道を通じて往来した時の人々の交流で語り継がれた物語と思う者です。伝説の中に登場する地名や場所は今でも静かに存在し、信ずる人にはロマンを生む伝説でもあると思います。